

女子高校生のグループの成員数と友人とのつきあい方の関係

筑波大学大学院(博)心理学研究科 佐藤 有耕

筑波大学心理学系 落合 良行

Relationship between the number of members in the classroom informal group and friendship relations among high school female students

Yuhkoh Satoh and Yoshiyuki Ochiai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study was to clarify friendship relations (as a fellow, supporter, or parent) among high school female students.

Examined was the relationship of the number of members in the classroom informal group and the degree of group action in the school to friendship relations among 339 high school female students. Principal results were as follows:

- a) The friendship relations as a fellow with the closest friend in the classroom informal groups had no significant difference among 2-8 member groups.
- b) Students who were engaged in a low level of group activities showed significantly less degree of fellowship relations with the less close friend than those who were in middle and high levels of group activities.
- c) The friendship relations as a supporter with the closest friend in the classroom informal group were of significantly higher degree in 6-8 member groups than in 9 and over member groups.

Key words: friendship relation, informal group, high school female students.

問題と目的

女子青年がクラスという集団の中に、さらに特定の仲良しグループを作りがちなのが指摘されている(永沢, 1969; 天野, 1975, 1985). 天野(1985)によれば, 大学生女子で, 高校時代にグループに入っていた者の割合は88.6%であった. グループとは, 昼食を共にしたり, 体育などの授業の時に教室移動を共にしたりする人々の集まりである. 学校では, 教室での授業時間を除くと, グループで行動する機会が多い. そのときに, 一緒に行動してくれる決まった人がいるかどうかということが女子生徒には非常に重要であり, 学校生活に適應している女子生徒の多くは, グループと呼ばれる特定の集団をもっている. そのため, 女子高校生の学校生活における友人関係を考えるときには, グループの存在を考慮に入れる必要がある. しかし, 女子高校生のグループが,

校内で一緒に行動していることは知られているが, ただ学校で行動を共にするだけの人間関係なのか, 内面的なつきあいをもつ友人関係があるのかは明らかにされていない. 悩みを相談しあい, 時には厳しい忠告もできるような深くかかわりあうつきあい方をしているのか, それともそのようなことはなく, お互いにあまり干渉したり, 議論を交わしたりはしないつきあい方をしているのかはまだ十分に知られていない.

また, 女子高校生ではグループの人数は多様である. 2人グループという最小の人数構成になる場合から, 9人グループなどの大人数で構成される場合もある. 2人グループでの友人関係と, 9人グループの友人関係が同じつきあい方であるとは考えにくい. グループの成員とのつきあい方は, グループの成員数の大小で異なることが予想される. 女子校の場合, 学級全員が女子であるため, 大人数のグルー

づがしやすい。グループの人数に関する研究には、女子大学生を対象としたものであるが、永沢(1969)のソシオメトリー的な手法を用いた研究がある。永沢によると、女子大生43名ではほぼ完全に相互選択が行われており、グループの人数は2人から6人であった。しかし、女子高校生のグループの人数を明らかにした研究は少ない。つきあい方と成員数の間の関係は、友人と広く浅くつきあいたいと望む生徒は人数の多いグループを形成し、親密に深くつきあいたいと望む生徒は人数の少ないグループを形成すると考えられる。つまり、グループの成員数の少なさは、深くかかわりあうつきあい方と関連するであろうし、グループの成員数の多さは、深くはかかわりあわないつきあい方と関連していることが予想される。さらに、成員数だけではなく、グループでほとんど行動を一緒にしている場合と、そうでない場合とでもつきあい方に差があることが予想される。行動を共にすることが多い方が、友人と深くかかわりあうつきあい方になるであろう。

本研究では、グループ内の友人とのつきあい方を、深くかかわりあうつきあい方と深くはかかわりあわないつきあい方の2種類を考える。グループ内の友人は、一番親しい人とあまり親しくない人の2種類を考える。そして、グループの成員数とグループで行動を共にする程度によって、つきあい方に違いがみられるかどうか検討することを目的とする。

方法

1. 質問紙の構成

(a)グループの構成 本研究ではグループの構成人数を調査するために、以下のような質問文を用いた「昼休みに教室で食事をするとき、あなたは(自分も入れて)何人のグループで一緒に食事が多いですか」。選択肢は「1人で食べる」から「10人以上」で、「決まっていない」という選択肢もつけ加えた。高校では昼の食事には教師の関与がなく、昼食時間の過ごし方については生徒の自主性に任されている。女子の場合、席を移動して、あるいは机をよせあって、それぞれいくつかのグループに別れて食事をすることが多い。もし、それまで一緒に食事をしてきた生徒同士で、今日から一緒にお昼を食べられなくなった、とグループの残りの成員から言われた場合、それはグループから除外されたことを意味する。一緒に食事を取らず、別々に昼食時間を過ごしていることで、他のグループの人にもそのグループが分裂したことが明らかにされるのである。つまり、誰がどのグループに所属しているかは、昼

食を共にしていることで表現されていると考えられる。また、行動を共にする程度については、教室移動時にも昼食のグループと一緒に行動するかを尋ねた。選択肢は「はい」から「いいえ」の5件法であった。

(b)友人とのつきあい方 友人とのつきあい方については、梅本(1987)の友人関係期待の30項目を用いた。グループの中で一番親しい人、グループの中であまり親しくない人の、2種類の成員のそれぞれについて、30項目の質問に回答を求めた。回答法は「よくあてはまる」から「全然あてはまらない」までの5件法であった。

2. 対象者

首都圏の私立女子高校1年生339名。

3. 調査時期

1992年7月。

結果と考察

1. グループの構成人数

グループの構成人数の分布はFigure 1に示した。選択肢が2人-9人までと10人以上となっていたため、10人以上と回答した者が32名あった。しかし、この人数がさらに細かく分布したであろうことを考慮すると、グループの構成人数の分布はほぼ正規分布をなしたと考えられた。昼食を一緒にとる相手が決まっていないと回答した者はわずかに8名であり、全体の2.4%に過ぎなかった。このことは、女子高校生が入学後、1学期の間に、すでに固定したグループ関係を形成していることを示している。決まったグループをもつ331名を2人から10人以上までの8群で χ^2 検定した結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2_{(8)} = 33.05, p < .01$)。2者関係、3者関係などの成員数の少ないグループや、9人、10人

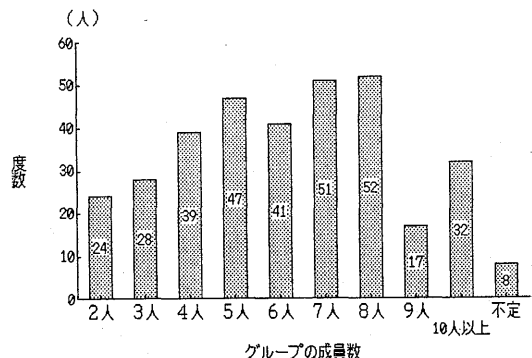


Figure 1 グループの成員数の分布(N=399)

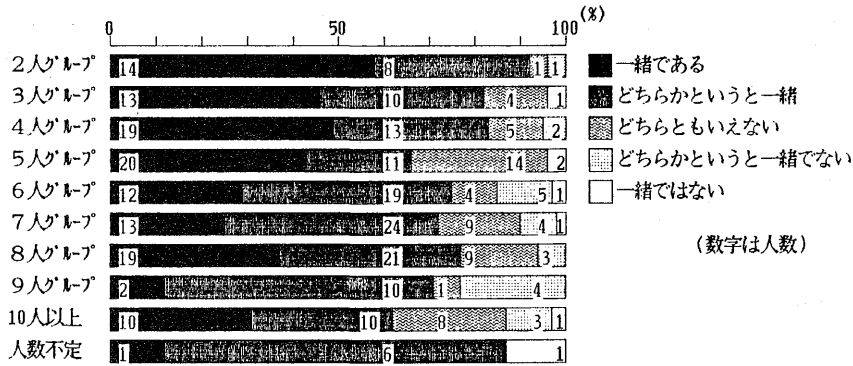


Figure 2 昼食を共にするグループと教室移動の一致度

以上の成員数の多いグループよりも、その間の人数のグループが多く形成されていることが示された。

昼食時のグループと教室移動などのときも一緒に行動するかどうかは、Figure 2に示した通りであった。全体では「はい」123名(36.3%)、「どちらかというとはい」132名(38.9%)、「どちらともいえない」55名(16.2%)、「どちらかというといいえ」22名(6.5%)、「いいえ」7名(2.1%)という結果であった。「いいえ」、「どちらかというといいえ」の否定的な回答は全体の8.6%にすぎなかった。昼食を一緒にとっているグループは、学校での行動もほぼ一緒にしていることが示された。この結果から、昼食を一緒にとっているグループを女子高校生の友人グループとすることに問題はないものとして研究を進めた。

2. 友人とのつきあい方についての分析

グループの中で一番親しい人、グループの中であまり親しくない人の2種類の成員に対する30項目のつきあい方を、それぞれ因子分析した結果がTable 1である。グループの中で一番親しい人についての回答結果から、解釈可能な3因子が抽出された(累積寄与率45.4%)。第1因子は「何か困った事や悩み事がある時に、あなたの相談相手になってくれる人」、「うれしい時や悲しい時に、一緒になって喜んだり悲しんだりしてくれる人」、「あなたの性格や行動などについて、正直な意見や感想を述べてくれる人」などの項目に高い負荷を持っていた。この因子は、お互いに内面的なことにも深くかわり、共感しあい、また一緒に行動するといった密接で対等なつきあい方と解釈できる。そこで「同士としての友人」の因子と命名した(以下、「同士」と記載する)。第2因子は「あなたの意見や考えに対して、あまり反対しない人」、「あなたのプライドを傷つけるよう

な事を言ったり、したりしない人」、「あなたの考えや行いに、あまり口を出したり、干渉したりしない人」などの項目に高い負荷を持っていた。この因子は、お互いに深くはかわり、そのため衝突もしないというつきあい方である。かつ自分の意見に賛同し、味方してくれる支持的なつきあい方でもある。そこでこれを「支持者としての友人」の因子と命名した(以下、「支持者」と記載する)。第3因子は「何でもあなたの無理をきいてくれる人」、「あなたの言うことには素直に従ってくれる人」、「いつもあなたをリードし、指導してくれる人」などの項目に高い負荷を持っていた。この因子は相互の関係というよりも、むしろ無理を聞き入れ、従ってくれるという親に対する子の甘えに近い関係と解釈できる。そこでこれを「保護者としての友人」の因子と命名した(以下、「保護者」と記載する)。

次に、グループの中であまり親しくない人の場合は、2人グループの者を除いた315名の結果である。3因子が解釈可能な因子として抽出された(累積寄与率45.1%)。第1因子は一番親しい人についての第1因子とほぼ対応していた。同様に、第2因子は一番親しい人についての第3因子と、第3因子は一番親しい人についての第2因子とほぼ対応していた。各因子への負荷量が、.60以上の項目だけを取り出し、2種類の友人の因子分析結果の因子間の対応を検討すると、あまり親しくない人の第1因子のうちの10項目中8項目、第2因子の2項目中2項目、第3因子の3項目中2項目がそれぞれ一番親しい人の第1、第3、第2因子と共通していた。各因子に負荷量の高い項目が相互に共通していたことから、どちらにも共通の因子名を与えた。あまり親しくない人の因子分析の結果は、第1因子を「同士としての友人」の因子、第2因子を「保護者としての友人」の因子、第3因子を「支持者としての友人」の因子

Table 1 グループで一番親しい人とあまり親しくない人についての因子分析結果

項 目	一番親しい人				あまり親しくない人			
	因子負荷量			h ²	因子負荷量			h ²
	Fac. I	Fac. II	Fac. III		Fac. I	Fac. II	Fac. III	
何か困った事や悩ましい事がある時に、あなたの相談相手になってくれる人	.81	.17	.08	.69	.77	.22	.08	.65
うれしい時や悲しい時に、一緒になって喜んだり悲しんだりしてくれる人	.77	.20	.13	.65	.73	.12	.21	.59
他の人には話さないような事でも、あなたには隠さず話してくれる人	.71	.11	.21	.56	.66	.28	.06	.51
あなたの性格や行動などについて、正直な意見や感想を述べてくれる人	.69	-.04	.13	.50	.70	.18	-.11	.54
あなたが悲しんでいる時やがっかりしている時などに、慰めたり励ましたりしてくれる人	.66	.35	.03	.56	.62	.19	.25	.48
あなたの性格や考え方を正しく、理解してくれる人	.66	.32	.22	.58	.58	.33	.26	.51
どのようなことでも、あなたの話をよく聞いてくれる人	.65	.37	.03	.56	.62	.20	.32	.53
これからの生き方や人生観などについて、まじめにあなたと話相手になってくれる人	.64	.07	.19	.45	.67	.17	.03	.48
何かわからないことや知りたいことがある時、親切に教えてくれる人	.62	.37	-.07	.53	.64	.04	.30	.51
あなたの間違いや短所などについて、率直に注意したり忠告したりしてくれる人	.61	-.16	.21	.44	.63	.11	-.22	.45
あなたのことを頼りにして、何かについてあなたに相談したり、あなたの判断を求めたりする人	.60	.18	.16	.42	.50	.22	.13	.31
あなたの特性や長所などを認め、高く評価してくれる人	.57	.37	.28	.53	.52	.39	.34	.54
どこかへ行く時や何かをする時に、いつもあなたを誘ってくれる人	.57	.35	.19	.48	.59	.39	.08	.50
一緒にいる時、あなたがあまり気を使わなくてもすむ人	.52	.27	.08	.35	.58	.18	.10	.38
あなたがどこかへ行く時や何かをする時、いつも一緒に行動してくれる人	.51	.31	.25	.42	.60	.27	.19	.47
いつもあなたに気を配って、何かと面倒を見てくれる人	.51	.39	.36	.55	.48	.47	.23	.50
あなたのライバルや競争相手になってくれる人	.41	.05	.37	.30	.22	.52	.05	.32
その人につきあうと、何かと肩身が広くなるような人	.32	.26	.13	.19	.40	.28	.18	.28
あなたの意見や考えに対して、あまり反対しない人	.11	.66	.25	.51	.09	.29	.59	.45
あなたのプライドを傷つけるような事を言ったり、したりしない人	.24	.65	.05	.48	.25	.07	.64	.48
あなたの意見や考え方について共鳴し、賛同してくれる人	.40	.54	.33	.56	.39	.41	.43	.51
あなたの考え方や行いに、あまり口を出したり、干渉したりしない人	.02	.49	.13	.26	-.09	.11	.67	.46
あなたの意見や考えが他の人と対立する時、いつもあなたの方に賛成し、味方してくれる人	.28	.47	.23	.36	.36	.29	.38	.35
あなたの性格や行動などについて、いつも良い方に解釈してくれる人	.34	.41	.31	.38	.49	.17	.46	.48
まじめな話や難しい話はあまりしないで、いつも愉快に遊ぶことのできる人	.01	.35	.06	.13	.36	.08	.21	.18
あなたのプライバシーにあまり深入りしない人	.10	.29	-.02	.09	.05	.01	.42	.18
何でもあなたの無理をきいてくれる人	.03	.32	.70	.59	.06	.67	.19	.49
あなたの言うことには素直に従ってくれる人	.07	.53	.60	.65	.12	.67	.36	.59
いつもあなたをリードし、指導してくれる人	.37	.11	.57	.48	.34	.53	.07	.41
しばしば手紙や贈り物のやりとりをしてくれる人	.41	.07	.45	.37	.37	.51	-.07	.40
各因子の寄与(2乗和)	10.53	2.07	1.03	13.63	10.35	2.04	1.14	13.53
因子寄与率(%)	35.1	6.9	3.4	45.4	34.5	6.8	3.8	45.1

となった。

グループの中で一番親しい人、グループの中であまり親しくない人の2種類がそれぞれ、同じ3因子構造であったため、友人とのつきあい方はこの3種類をとりあげることとした。予想していた深くかわりあうつきあい方は「同士としての友人」の因子となり、深くはかわりあわないつきあい方は「支持者としての友人」の因子、「保護者としての友人」の因子の2つに分かれたと考えられた。それぞれのつきあい方の指標には、因子得点を用いて以下の検討を行った。

3. グループの成員数、共に行動する程度とつきあい方の関係

まず、2人グループから10人以上のグループ、そして人数不定という11カテゴリー別に3種類の友人とのつきあい方を因子得点で図示したものがFigure 3, Figure 4である。数値はTable 2に示した。11カテゴリーの得点を1要因の分散分析で比較したところ、一番親しい人を「支持者」としたつきあい方で有意傾向がみられたのみであった($F(9,329) = 1.75, p < .10$)。LSD法による多重比較の結果、2人=10人以上 > 7人=8人=4人=5人であった

($MSe = 0.98, 5\%$ 水準)。この結果とFigure 3を照らしてみると、グループで一番親しい人との「支持者」としてのつきあい方は、成員数と逆U字型の関係にあることがわかる。成員数が大きくても小さくても「支持者」としてのつきあいは少ないということが示唆された。10人以上という大人数の中でのつきあいは、支持者であることさえもあまり求められない、浅いつきあいと考えられる。一方、2人グループの場合は、他に介在する人はなく、常に向き合っているような関係のため、深くかわりあわずにただ“なあなあ”で支持者になるというつきあい方は少なくなると考えられた。

有意な差はみられなかったが、得点上では、一番親しい人を「保護者」としたつきあいが、10人以上グループ、人数不定の群で高い傾向がみられた。成員数の多さが、深くかわりあわないつきあい方と関連するという予想との一致はここでだけみられた。また、あまり親しくない人を「同士」とするつきあいでは、3, 4, 5人グループでは因子得点が正の値で下降し、6, 7, 8, 9人グループでは負になって下降する傾向がみられた。深くかわりあうつきあい方と成員数との関連は、一番親しい人の結果ではみられなかったが、あまり親しくない人との間で

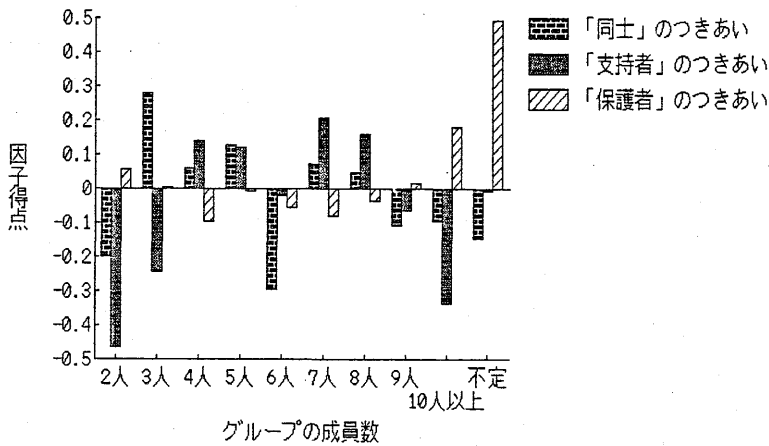


Figure 3 一番親しい人とのつきあい方の因子得点

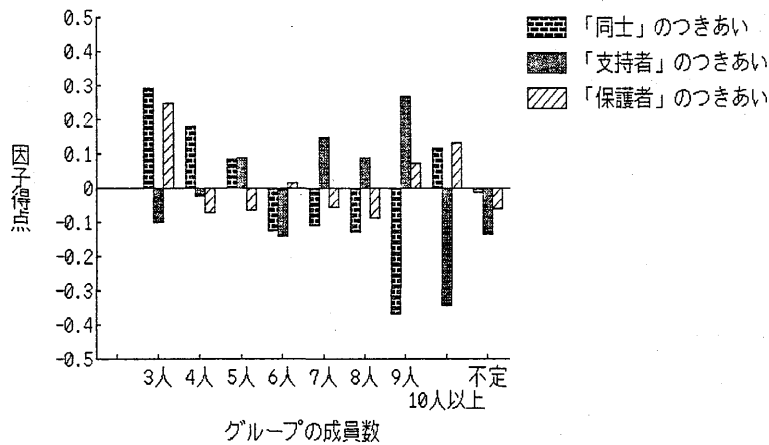


Figure 4 あまり親しくない人とのつきあい方の因子得点

は若干その傾向がうかがわれた。

次に、成員数を小グループ・中グループ・大グループの3水準にまとめ、行動を共にする程度も高・中・低の3水準として、つきあい方との関連を検討した。グループは成員数2～5人までを小グループ(N=138)、6人～8人を中グループ(N=144)、9人～不定までを大グループ(N=57)とした。行動を共にする程度については、行動を一緒にするかという質問に「はい」と回答した者を高群(N=123)、「どちらかというとはい」と回答した者を中群(N=132)、それ以外の回答をした者を低群(N=84)とした。

(a)友人を「同志」としたつきあい方 Figure 5はグループで一番親しい人の得点の各条件ごとの平均値を図示したものである。数値はTable 3に示した。分散分析の結果、交互作用が有意であった($F_{(4,330)}$

$=3.01, p<.05$)。そこで、各水準ごとに単純効果を検討した。すなわち、成員数の要因は共に行動する程度が低いときに有意であるが($F_{(2,330)}=4.78, p<.01$)、共に行動する程度が高い場合、中程度の場合には有意ではない。また、行動を共にする程度の要因は、成員数が多いときには有意であったが($F_{(2,330)}=9.64, p<.01$)、少ない場合、中程度の場合には有意ではなかった。LSD法による多重比較の結果、共に行動する程度が低い場合、小グループ=中グループ>大グループであった。大グループの場合、行動を共にする程度の高群=中群>低群という結果が得られた($MSe=0.96, 5\%$ 水準)。

グループであまり親しくない人の得点については、共に行動する程度の効果のみ有意であった($F_{(2,306)}=6.36, p<.01$)。Figure 6は各条件の平均値を図示したものである。数値は先のTable 3に

Table 2 成員数別のつきあい方の因子得点

	一番親しい人			あまり親しくない人		
	「同士」	「支持者」	「保護者」	「同士」	「支持者」	「保護者」
成員数						
2人(24)	-0.198 1.318	0.992 0.202	0.057 0.635			
3人(28)	0.283 1.136	-0.240 1.001	0.006 1.017	0.293 0.989	-0.098 0.828	0.250 0.993
4人(39)	0.061 0.882	0.141 0.714	-0.093 0.833	0.182 0.975	-0.022 1.005	-0.070 0.891
5人(47)	0.131 0.936	0.123 1.139	-0.004 1.024	0.088 1.126	0.090 1.238	-0.063 1.018
6人(41)	-0.292 0.949	-0.020 0.967	-0.053 0.675	-0.122 0.979	-0.139 1.087	0.017 0.744
7人(51)	0.075 0.956	0.210 1.018	-0.077 1.248	-0.105 1.087	0.151 0.995	-0.054 1.085
8人(52)	0.048 0.914	0.162 0.911	-0.033 1.006	-0.124 0.948	0.092 1.011	-0.084 1.115
9人(17)	-0.105 1.134	-0.062 1.443	0.017 0.966	-0.367 0.852	0.271 0.801	0.075 0.810
10人以上(32)	-0.096 0.994	-0.334 0.856	0.184 1.321	0.116 0.919	-0.340 0.675	0.136 1.257
不定(8)	-0.147 1.136	-0.008 0.945	0.494 0.891	-0.010 0.677	-0.133 0.858	-0.058 0.579

数値は上段が平均値，下段が標準偏差，カッコ内は人数。

示した通り，多重比較の結果，行動を共にする程度の高群＝中群＞低群であった(MSe = 0.96, 5%水準)。

親しい人でも親しくない人でも，行動を共にする程度が低くなるほど「同士」としてのつきあい方は低くなる傾向が示されている。しかし，有意な差は，親しくない人の場合と，親しい人の成員数大グループにしかみられなかった。このことから，成員数が9人以上の大グループでは行動を一緒にする程度が低いと，親しい人とでも「同士」として深く関わるつきあい方は少なくなることが示された。あまり親しくない人についてはグループの成員数にかかわらず，行動を共にする程度が低い場合には「同士」として深くかかわるつきあい方は少なくなっていった。しかし，成員数の大小による差は，親しい人で共に行動する程度が低いときにしか見られなかった。したがって，成員数8人グループまでであれば，そのグループと共に行動する程度の違いにかかわらず，親しい人と対等に深く関わるつきあい方に差はなかった。

(b)友人を「支持者」としたつきあい方 一番親しい人の得点の，各条件ごとの平均値はFigure 7に図示した。数値は先のTable 3に示した通り。有意な交互作用はみられず，成員数の効果のみに有意傾向がみられた($F_{(2,330)} = 2.60, p < .10$)。多重比較

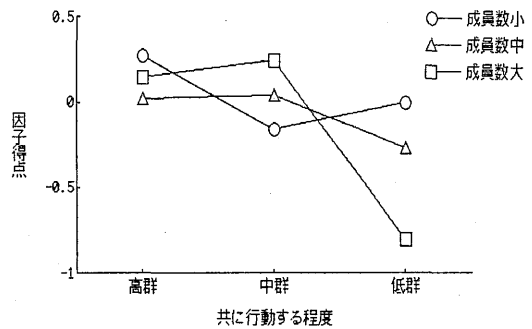


Figure 5 一番親しい人の「同士」因子得点の平均値の比較

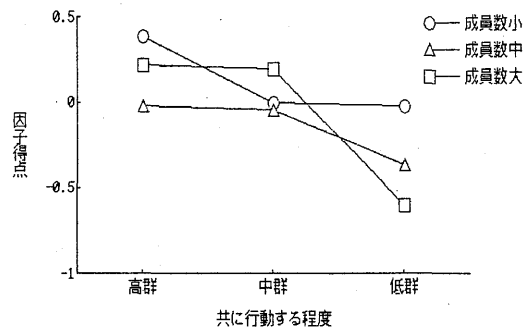


Figure 6 あまり親しくない人の「同士」因子得点の平均値の比較

Table 3 成員数と、共に行動する程度を組み合わせた9群ごとのつきあい方の因子得点

	一番親しい人			あまり親しくない人		
	高群	共に行動する程度 中群	低群	高群	共に行動する程度 中群	低群
「同士」						
成員数小 (2~5人)	0.278 1.086 (66)	0.026 0.875 (44)	0.147 0.957 (13)	0.388 1.070 (52)	-0.021 0.789 (44)	0.221 1.192 (13)
成員数中 (6~8人)	-0.157 0.968 (42)	0.042 0.943 (64)	0.246 0.676 (26)	-0.004 0.889 (34)	-0.044 1.034 (64)	0.200 0.558 (26)
成員数大 (9人以上)	-0.001 0.923 (30)	-0.264 0.987 (36)	-0.797 1.149 (18)	-0.022 1.048 (28)	-0.364 1.112 (36)	-0.593 0.713 (18)
「支持者」						
成員数小 (2~5人)	0.115 0.986	-0.016 0.998	-0.489 1.141	0.118 1.088	-0.092 1.066	-0.156 0.884
成員数中 (6~8人)	-0.126 0.854	0.282 0.903	-0.136 1.125	-0.242 1.109	0.144 1.006	-0.090 0.607
成員数大 (9人以上)	-0.294 1.126	0.027 0.973	-0.106 0.828	0.096 0.882	0.044 0.981	-0.166 0.878
「保護者」						
成員数小 (2~5人)	-0.030 0.950	-0.249 0.940	-0.096 1.176	0.062 1.059	0.142 1.075	-0.267 1.350
成員数中 (6~8人)	0.072 0.801	-0.079 1.021	0.313 1.274	0.070 0.866	0.037 0.912	0.038 1.008
成員数大 (9人以上)	-0.113 0.914	-0.380 0.976	0.180 0.890	-0.155 0.879	-0.419 0.966	0.426 0.678

数値は上段が平均値、下段が標準偏差、カッコ内は人数。

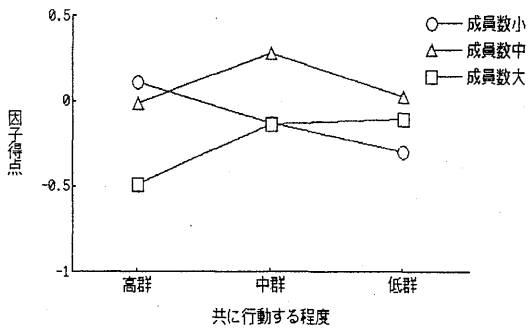


Figure 7 一番親しい人の「支持者」因子得点の平均値の比較

の結果、中グループ>大グループであった(MSe = 0.98, 5%水準)。あまり親しくない人では、有意な差はみられなかった。

一番親しい人との間で、あまり深くかわからない「支持者」としてのつきあい方が、成員数と関連し

ていた。成員数が9人以上のグループでは、6-8人のグループに比べて「支持者」としてのつきあい方の得点が低い。深くかわからないが、支持的であるつきあい方も、6-8人のグループに比べて9人以上の大グループで低かった。グループの成員数の多さが、深くかわかりあわないつきあい方と関連しているという予想と一致しない結果となった。これは、9人以上の成員数の多いグループでは、自分を支持してくれる友人関係が少ないことを示している。

(c)友人を「保護者」としたつきあい方 一番親しい人では、有意な差はみられなかった。あまり親しくない人について、各条件の平均値を図示したものがFigure 8である。数値は先のTable 3に示した通り。分散分析の結果、交互作用が有意であった($F_{(4,306)}=3.10, p<.05$)。そこで、各水準ごとに単純効果を検討した。成員数の要因は、共に行動する程度が低いときに有意であるが($F_{(2,306)}=5.23, p<.01$)、共に行動する程度が高い場合、中程度

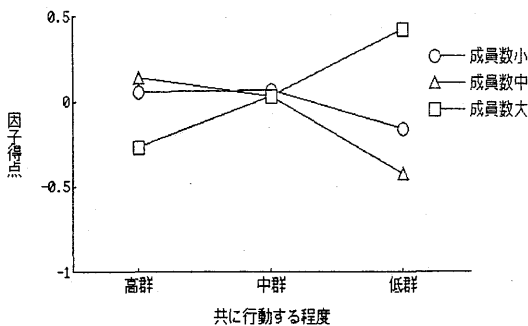


Figure 8 あまり親しくない人の「保護者」因子得点の平均値の比較

の場合には有意ではない。また、行動を共にする程度の要因は、成員数が多い場合には有意($F_{(2,306)} = 3.38, p < .05$)、中程度では有意傾向であった($F_{(2,306)} = 2.49, p < .10$)。成員数が少ない場合には有意ではなかった。多重比較の結果、共に行動する程度が低い場合、小グループ=中グループ<大グループであった。共に行動することが少ない場合には、成員数が多いグループでは「保護者」としてのつきあい方が多くみられる。中グループの場合は、行動を共にする程度の高群>低群であり、大グループの場合には行動を共にする程度の高群<低群という逆の結果が得られた($MSe = 0.99, 5\%$ 水準)。6-8人グループでは行動を共にしないほど「保護者」としての友人というつきあい方が低く、9人以上グループでは行動を共にしないほど「保護者」としての友人というつきあい方が高くなっていった。「保護者」としての友人というつきあい方は、対等なつきあい方ではない。言うことを聞いてくれ、リードもしてくれる人に甘えられるというつきあい方である。共に行動しない9人以上グループでこのつきあい方が多くみられることは、この場合には対等なつきあい方が少ないことを示しているものと考えられた。

まとめと今後の課題

今回の結果からは、グループの成員数によって、グループの成員との間でつきあい方に差があるというはっきりした結果は得られなかった。行動を共にする程度による差も十分な結果は得られなかったと言える。今回、深くかかわり合うつきあい方の指標として、「同士」としてのつきあい方を比較した。しかし、成員数8人までのグループでは、行動を共にする程度にかかわらず、グループの中の親しい人

とのつきあいに差はみられなかった。あまり親しくない人とのつきあいでも成員数による差はみられなかった。したがって、女子高校生のグループはその成員数の多少にかかわらず、グループの中の人と深くかかわり合うつきあい方に差はないことが示された。このことから、グループの成員数はその中のつきあい方を示す指標にはならないと言えよう。むしろグループの形成や成員数の決定は、多くは偶然によって支配されていることと考えられる。

深くかかわらないつきあい方については、6-8人グループよりも9人以上グループの方が、グループで一番親しい人を「支持者」とするつきあい方が少ないことが示された。9人以上の大グループの場合には、意見を対立させることをせず、とりあえず賛成してくれるというかかわり方さえも少ないことが示された。また、あまり親しくない人を「保護者」とする深くかかわらないつきあいは、6-8人グループでは、行動を共にする程度が低いグループで少ない。逆に9人以上のグループでは、行動を共にする程度が低いグループで多い。9人以上のグループの場合は、つきあい方と行動を共にする程度の低さとの間に関連がみられた。あまり親しくない人を「保護者」とするつきあいは多く、一方親しい人を「同士」とするつきあいは少なかったのである。行動を共にしない9人以上のグループは、積極的に集まった友人同士というより、他のグループに参加し損ねた人々の集合体とも考えられる。女子高校ではひとりで行動することは最も望まれないことであり、たとえどんなつきあい方であれ、人と一緒にいることを必要としている。そのため、昼食を共にするグループではあっても、友人関係があまり進展しないこともあると思われる。相互に意見を交換したり内面をうちあけるような関係にならず、それほど親しくない人にさえ、ただ一緒にいやすいように気を使いあった関係が続いていると考えられる。9人以上のグループでも、行動を共にするような友人関係では、このつきあい方が少なくなっていくことが示された。今回の結果は友人関係が成熟していくにつれて、深くかかわらない「保護者」としてのつきあい方は少なくなっていくことを示していた。全体として、9人以上の成員数のグループは他のグループとは異なる人間関係であることが示唆された。

今回の研究では、グループの成員数を、ソシオメトリ的な手法を用いず、質問紙法によって調査した。そのため、ここでとらえられたグループは、ソシオメトリによるとらえ方よりも厳密ではない可能性もある。本研究での昼食を共にするグループが、実際にはさらに内部でより親密なグループに細分化

されていることも考えられる。この点を詳しく吟味することが今後の研究では必要になろう。また、グループで一番親しい人との深くかかわるつきあい方には、グループの成員数による差はみられず、グループの成員数の違いと友人とのつきあい方の違いに関連はみられなかった。今後はグループで一番親しい友人が、親友と呼べるような存在なのか、あくまでも学校内だけの友人なのかを明らかにし、女子青年の友人関係をグループという視点からさらに検討することが必要であろう。

付 記

調査の実施にあたり、私立淑徳与野高等学校永嶋美枝子先生に多大なご協力をいただきました。記して謝意を表します。また実際に調査にご協力頂いた

諸先生、高校生みなさんに心から感謝致します。

引 用 文 献

- 天野隆雄 1975 女子校のよい点・わるい点と女子生徒の友情 女子生徒の心理とその教育 早稲田大学出版部 Pp. 99-142.
- 天野隆雄 1985 女子生徒のインフォーマル・グループ アジア文化10, 87-95.
- 永沢幸七 1969 女子学生の informal group の発生要因について(その1)― YG 性格検査を中心手続きとして― 東京家政学院大学紀要, 9, 17-27.
- △梅本信章 1987 友人関係期待と現実の友人 盛岡大学紀要, 7, 71-80.

—1992.9.30受稿—